

はじめに

第12号研究紀要が発刊の運びとなりました。本校の紀要は隔年おきの発行で、2年間における先生方の研究された成果である。

さて、今まで、日本はアジアのなかで経済的に恵まれ、アジア各国の羨望的であった。しかしながら、今、東アジア諸国のめざましい経済発展により、日本は経済的に苦境に立たされている。この状況を克服するには、これからの日本を支える若者の活躍に期待せざるを得ない。

さて、日本において生徒たちの理科離れが言われて久しいが、現実には理科離れだけでなく、学習全般の意欲の低下が進行しているように思われる。流行や芸能の誘惑に負け、学問への興味が失せている若者が多いような気がする。この状況を変えるには、教育界だけでは難しい問題が多々あるように思えるが、先ず我々教育に携わる者が反省し、学問に対する意欲を高めるためには、どのようにすればよいか考えてみる必要があると思う。その一つとして、一人ひとりの教師が何か研究課題を持ち、それを究めようとする姿勢を見せるならば、必ず生徒たちに良い影響を与えるような気がする。知識の詰め込みだけでなく、「何故だろう。」「どうしてだろう。」という真理を究めようとする姿勢が生まれてくるのではないかと思う。それがひいては学習に対する意欲の向上に繋がるような気がする。また、先生方が何かを研究されることはそれが資質の向上になり、授業に反映されより質の高い授業内容になると確信します。このような意味で先生方が主体的に研究課題をもち、日常的に研究されることを期待したいと思う。

今回の紀要もまた、内容の充実した先生方の日頃の研究成果と本校の教育活動の一端を紹介できたのではないかと思う。

最後に、この紀要の編纂に当たり多忙な時期にも関わらず、寄稿をいただいた先生方と編集に当たられた先生方に感謝申し上げますとともに、多くの方々に御高覧をいただき、御指導・御助言を賜りますようお願い申し上げます。

鹿児島県立古仁屋高等学校長 古城志郎